
暗闇の中で

シラベ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇の中で

【コード】

N4952S

【作者名】

シラベ

【あらすじ】

勇気のない自殺志願の少年の物語。

暗い話です。

墮ちて、落ちた

夜。 外が暗くなると、自分の心までが暗くなる気がする。ただ、夜が嫌いというわけではない。

むしろ夜は好きだ。

部屋は基本電気はつけない。そっちの方が落ち着く。

「おい、スイカ切ったぞー、降りてこーい」

一階から響いてくる声がこの上なく鬱陶しく感じた。

最近嫌ことばかりだ。

学校では虐め。 先生まで一緒になって虐めてくる。 それに加え家で父親の暴力。

現在は父親は出張で家にはいない。 だが、それだけで苦痛が無くなるわけではない。

手首には無数の切り傷、二の腕にも、足首にも、太ももにも、

今日は初めて首にまで手を出した。

正直首は死ぬかと思った。 いや、死ぬつもりでやったのだからこの表現はおかしいのだろう。

いつも死にたいと思って、小さくだけでも口にも出して……。

なのに、いざその時になると足がすくむ。 手が、止まる。

死ぬ勇気すら僕にはないのだ。 そんな自分が笑えてくる。 そんな

自分が、イラつく。

だが、今日は違う。

唯一の救い。 唯一、身を寄せることの出来る人。 尊敬し、憧れ、

目標だった人

先輩が、死んだ。

単純な、単なる、交通事故だった。

先輩を轢いた車は、現在逃亡中だ。

先輩を轢いた奴が憎い。それは当然だ。でも、それ以上に生きる希望が無くなった。

そして決心した。今日、この日、勇気を出す、と。

下を見ると、暗闇が大きすぎる口を開けて、僕が飛び込むのを待ち構えているようだった。

やはり、というか、当然だが足がすくんだ。

心臓が張り裂けそうなほどにうるさく身体に血を巡らせる。

だが、このまま家に帰ってどうなる？

また学校に行き虐められ、数日後に帰ってくる父親に新たな痣をつけられ、今までよりどころにしていた先輩の声を聴くこともできず、また、苦しむのか。また、自ら自分に傷をつけるのか……？

それが嫌だから今、ここにいるんだ！

ちよつと前に進むだけの勇気すら僕には無いのか！

死ぬ勇気すらないのか！ 足を一步、前に出すだけの！勇気だ！

10分ほど時間が経っただろうか。

さつきまでうるさく悲鳴を上げていた心臓も落ち着いてきた。

身体の震えも、既はない。

冷静になる。恐怖はない。

勇気なんか無くても、一步踏み出せる。今なら。

今までの先輩との声が頭に反響する。

「これが走馬灯ってやつか……。」

おかしくなり、笑みが漏れる。

『お前は一人なんじゃねーだろ？私がいる。安心しな？』

「先輩……僕、一人ですよ……。今、一人で」

言い終わる頃には、僕は闇に飲まれていた

堕ちて、落ちた（後書き）

これを書いた時は正直精神的に不安定な時期だったので、こんなに暗い話になっちゃいました。

勢いだけで書いた感があるので、今日（7/12）おかしい所を書き直しました。

始まりか終わりか(前書き)

今回は少しグロイところが最後にあります。
前回は引き続き・・・くらいですw

始まりか終わりか

「血圧！」

「早くしろ！命がかかってるんだ！」

「出血が止まりません！！」

「くっそ！絶対助けてやる！」

ぼーっ　とした意識のなかで、何人もの人の怒鳴り声を聞いた気がした。

でも、その大きな声は、今まで僕を傷つけてきた人達のような……そんな声ではなかった。

良い意味での、熱意。強い想い。”諦める”なんて言葉が感じられないような、そんな迫力

目が覚めた。

そこは真っ白な部屋だった。自分が寝ているベッドも、壁も、床も。

違和感があった。ついさっきまで、僕は暗闇にいたはずだ。それがどうして、こんなにも白に統一された部屋にいるのか……。

しばらくして気が付いた。

「びょう……いん、か……。」

目が覚めるのを見計らったように、病室の扉が開かれた。入ってきたのは、看護婦の人だ。

僕の顔を見るなり、驚いたように引き返して行った。

身体が動かない。　全身に包帯を巻かれているようだ。

無理に動かそうとすれば、全身を針で突かれたような痛みが襲う。

「痛い……、痛いんだ……。」

そう、痛い。

痛い、痛い、痛い、苦しい。辛い。

つまりは、それは、生きている証拠。証。

また……、また、僕は死ぬことができなかった。

勇気を出した……。人生で一番、勇気を出した。

文字通り、振り絞った……。

なのに……。死神は僕を見放した。

涙なんてとつくと枯れている。強く物に当たりたい。殴りたい。

何もかもを壊してしまいたい。

でも、今の僕では歩くことすらできない。

それが、もどかしい……。

結局自分には何もできない。そんな、ネガティブな思考しか出て

こない。

病室の扉が開いた。

歳をとった男が入ってきた

「おめでとう。今日で退院だ。リハビリも辛かったらう？ でもそ

れを乗り越えた君なら、これからの人生、きつと頑張れる。 わし

も応援しとる。頑張れよ、少年！」

「はい、ありがとうございます」

人当たりの良い笑顔を目の前の医者に向け、感謝の言葉を口から出す。

そうだ、この1年と3か月、ずっと、ずっと耐えてきた。

リハビリに、ではない。 その程度の苦痛、味わい飽きるほどに味

わってきていた。

耐えてきたのは、「更生した自分を演じる」こと。

自殺志願者。 本当ならば精神病院にでも入れられるだろう。

でも、それじゃあ意味がない。 それじゃあ……死ねない。

僕は早く死にたいのだ。 そんなわけのわからない所に入れられ、時間を浪費なんてできない。

そんな無駄な時間はない。

今度は失敗しない。 絶対に、絶対だ！

違和感

なにかが違う。

なんだ？ わからない。

なにが違う？ なんだろう。

僕は……

「うん？ どうしたんだい？ 顔色が悪いぞ？ また入院するかい？」

「あ、いえ！ ちょっと、久しぶりに外に出たので！」

「ああ、そうだねえ。 まあ、すぐに慣れるさ。 じゃあな、少年。」

医者に別れを告げ、駅に向かう。

親がそこで待っているらしい。 病院まで来ない。

道中、また考える。

さっきの違和感。

僕は「死ぬ」ことを目標に生きていたのか？

リハビリも、「死ぬ」ために。していた・・・？

入院中は虐められることも、殴られることも、冷たい目で見られることも、なにもなかった。

死にたかった理由、それは、辛いから。生きていても、意味が無いと思っただから。

でも、入院中はどうだった？

充実……、そう、充実していた。

リハビリでは、歩ける歩数が増える度に皆が褒めて、笑顔を向けてくれた。

病室でも、看護婦の人、同室の患者、色々な人達と色々な話しをした。

楽しかった。死にたいと、思ったのは最初の頃だけだった。

「僕は……、生きたい。」

少なくとも、入院中は、そう思えた。いや、

「死ねなくて、よかった……。」の方が正しいのか。

そう思い、考え直す。

でも、家に帰り、学校に行けば、また 暴力、虐め、奇異の目、
抛り所のなくなった世界。

それが待っている……

やはり今までと何も変わらなかった。

今日だけで既に何十発も殴られた。直っていた傷が開き、教師は何も言わず、授業。

自分でつける傷。 それもまた増えていくだろう。

暗闇で見つけた、たった一つの光。それが「入院」
もう一度、その光を掴めば、僕は……！

骨というものは意外と脆いものだった。

簡単に折れた。

意外と固かったのは、肉。筋肉だ。

でも、簡単に切れた。

僕は、一生足元を見ることができなくなった。

僕の身長は、今、93？

歩くための、一部は、

自ら切り取った。

光を、掴むために

始まりか終わりか（後書き）

同じくおかしい所を書き直しました。

随分と読みにくい文章でしたね（笑）

直しても読み易くなったかはわかりませんが……w

番外編「呪いの両足」

「呪いの両足って知ってる？」
学校からの帰り道だった。

「ん？ 何、そのおもしろそうな名前」

学校の七不思議、この町の都市伝説（むしろ町伝説？）、世界七不思議の謎、等々……

そんな話しを、友達としていた。

他愛もない話した。友達も自分も、本気で話しているわけでは、もちろんない。

正直なところ、そんな非科学的な話しを信じているわけでもないし、ね。

「なんかね、昔、虐めが理由で自分の両足を切った人が残したもののらしいよ？」

だからこそ、こんな風に笑いながら話せる。

「へえ……、残したものの、ってその人の両足じゃないの？」

「うん、名前は関係なくって、色んな説があるんだけど……、確かあ……」

人というのは、なぜ恐怖を娯楽に変換することができるんだろう。普通、恐怖なんて、近づきたくない、関わりたくない、口にしたくない、思い出したくない。それでも人はそれを面白がる。

そんなことを考えていると、恐怖を楽しむ、人という生き物は、相当に可笑しな、奇妙な生き物なんじゃないかと思えてくる。本当のホラーは人間なのかな……？

「あ、そうそう、十字架のペンダント っていうのが一番よく聞くかな。」

それはまた……オシャレな物だこと……。

それにしても、虐めが理由で両足を切り落とす。なんてのは、変

な話だ。

普通、自殺とか、リストカットとか、そういったことだろう。なぜ両足を切り落とすに至ったのか……。私としては、オシャレなペンダントよりも、そちらの方が非常に興味をそそるんだけどな。「で、そのペンダントがなんなの？」「呪い」なんてついてるんだから、なんかあるんでしょ？」

自分の興味を無理やり抑え込み、きつと相手が聞いて欲しいだろうな　ということを知っている。

「ん？　あ、そうそう。でね、そのペンダントには　」

「ほら、今日誕生日だろ？　あげる。」

放り投げられた小さな箱を、慌てて受け取る。

青い包装紙に包まれた、四角の箱だった。

「あの、えつと……、ありがとうございます。」

何気に、これが先輩からもらった初めての物だったりする……。自然と頬がゆるくなる。

「なーにこれくらいのことではやけてんの。ただの安いペンダントだよ？」

「それでも、初めてのプレゼントだし。なにより、先輩からの、ですから。」

ここで開けてもいいかの了承を得て、包装紙を破く。

箱のふたを取ると、なかには十字架のペンダントが入っていた。

「ロザリオ……ってやつですか？」

「まあ、そんなとこかな。ま、ほんとのロザリオには程遠いけどね」

「いえいえ……、一生大事にさせていただきますとも……。」

先輩との別れを告げ、帰路に着く。

自室のイスに座り、先ほどのペンダントを机に丁寧に置き、眺めてみる。

やはり顔がにやけてしまう……

なんとなく、ペンダントを箱から出してみる。

「ん？」

箱の底に手紙が入っていたのを見つけた。

ドキドキする。

厚さからして、結構ながい手紙らしい。

顔が真っ赤になり、意味もなく周りを見渡す。手汗の量がもの

すごい……。手紙一枚読むだけでどんだけ緊張してるんだろ……。

手紙を読み終わる頃には、僕は人に見せられないほどに、それはもう酷い顔で泣いていた。女々しく涙をぼろぼろこぼして、嗚咽をあげていた。

僕は初めて、まっすぐな好意を感じた。先輩から、僕への好意。

「好き」という。「君じゃないとダメなんだ」という。

今までは、憧れの存在だった。いや、今の今までそう思っていた。

「好き」と言われたからかもしれない。初めて好意を向けられ

たからかもしれない。

でも。

それでも。僕は先輩が好きになった。好きだった。

それから、僕達は付き合うようになった。

先輩からもらったペンダントは、いつも身につけていた。寝る前には、外して眺めてから寝ていた。先輩からもらった物は、結局これだけになってしまったけど……。

それから色々あって、僕は今、精神病院と並設している病院で入院している。

ベッドの横にはいつもペンダントを飾ってある。先輩がいなく

なつて、僕は絶望して、無気力になつて、希望を失つて、すぐるものもなく。 そんなのだから、今ここにいるのだろう。 自ら身長を縮めたことは、後悔していない。

実際、この病院に入院してからは、虐められることも、殴られることも無くなつた。 僕と同じ、精神病患者もたくさんいて、その中の何人かとは、仲良くもなつた。

でも、足りない。
足りないのだ。

「何が？」と聞かれれば、それははつきりとは答えられない。

自分でもわからないけど、それは、多分「愛」とか。

そんな簡単なものなんだと思う。 だつて、僕はそんなに物事を難しく考えることなんか、できないから。

だから、そんな単純な僕だから、ペンダントの存在を思い出した時、本当に救われた気持ちになつたんだと思う。

だから、今、僕は先輩以上にこのペンダントに愛を注いでいる。

「またそのペンダント見てるのー？ ほんと好きだねえ」

つい最近仲良くなった、隣部屋の子だ。 いつの間にか部屋に入つて来ていたらしい。

「あ、うん。 ていつか来てたんだ。」

「えー、入る時ノックしたのに……」

気が付かなかった。 どれだけ集中して眺めてたんだらう……。

「あのさあ、こんな話ししつてる？」

僕を見て思い出した話らしい。 彼女としては、「冗談半分で言ったのだらう。 いや、こんな話しを本気でする方が、おかしい人なんだらうけど……」。

「喜怒哀楽、どの感情かは関係なく、多すぎる感情を注がれた『物』には悪霊だか、守護霊だか、なんか憑くらしいよ。 だから、昔の人は物を大切に扱っていたらしいね。」

いや、僕だつて本気で聞いていたわけではないんだけど。

その話しを本気にしちゃいそうなほどに、そのペンダントに沢山の、大きな、多い、多すぎる、愛を注いでいたから。

「だから、そのペンダントを身に付けてるとね、恋が成就するって言われてるんだって。」

「それで、なんで『呪いの』になるの？ 恋が成就するのに。」
そう、普通は「恋のペンダント」とか、そういう名前がつくはずだ。この際私のネーミングセンスの話はどうでもいい。とにかく、「呪いの」なんて名前がつくような物じゃないだろうに……。
「ああ、それはね」

人とは、やはりホラーな生き物なのかもしれない。
自分の持っていない物を持っている人を見れば、それを妬む。羨む。

時として、その妬みや憧れは、大きな過ちをおこす原因となる。
でも、それでも、私は楽をして欲しいものを手に入れることを良いことだと思う。

もちろん、殺人や強盗を善しとするわけではない。 犯罪はもちろんダメだ。

ただ、楽をして自分の欲しいものが手に入るなら、それは別にいいのではないのか。誰かを傷つけてでも、多少の犠牲を払ってでも、手に入れたいものなら。

だって、それは怠けでも、墮落でもないから。
欲しいものを、出来る限りの手段をもって手に入れる。 それは悪いこと？ 全然。 全然悪くなんかない。 私の人生の長さはわからないけど、おそらく人生の半分も生きてないような、そんな高

校生の私が、こんな偉そうなことは言えないけど。

でも、今回の話しの落ちが、

「彼女が出来ない男たちの妬みからつけられた名前らしいよ」
「だったら、こんなことも言いたくなるだろうさ。」

番外編「呪いの両足」(後書き)

今回も、場面切り替えを使用してしまいました…。

いやあ、やっぱり便利ですね、「***」はww

「まだ続きます」にしておきますが、多分今回で終わりです。
話しが思いついたらor気が向いたら 続き書きますw

希望の中で（前書き）

しないと言いながらしてしまった：w w
はい、これは入院中の『僕』のお話です。

希望の中で

窓から外を眺めていた。

そんな僕を眺める、少女がいた。

「ねえ、なんで君はずっと外を見てるの？」

さつきからこの調子だ。無視されていることに気が付かないのだろうか……。

精神病院の並設された病院。

この病院に、2度目の入院に来たのは、1週間前のこと。

自分で希望を掴むために、切り落とした、僕の一部。

今も痛みは引いてはいない。少し動くだけでも結構痛い。

でも、それは後悔なんてしていない。だって、現に今。僕はこうして……

安全に。 安心して。 生きている。

一人部屋だからだろうか。それとも、まだ病院に来てから1週間しか経ってないからか。

人と触れ合うことは、今の所ほとんどない。

いや、医者を除けば、0だ。

あ、今はこの状況は、「触れ合っている」ことになるのだろうか……

「ねえってばあー。もう……聞いているの……ああ！なにこれえー

！綺麗なペンダントおー！」

「っ！」

無言で彼女の手からペンダントを奪う。
その顔はかなり怖い顔だったのだろう。 僕の顔を見た少女は目
じりに涙をためていた。

「あ、いや……その……、これは、なんていうか……、大事なも
の、だから……。」
久しぶりに口にする言葉に、何度も転びながら、それでも言った。
「これは、だい……、大事な、人から、もらった物、だから……。」

僕の言葉を黙って聞いていた少女は、きょとんとしていた。
もしかして僕の言ったことが理解できていないのだろうか。
それとも、久しぶりに話す言葉に、間違いでもあったのか。
急いで頭の中で、今言ったことを思い出してみる。 おかしい所
はないな、うん。ない……はず。

「あの……、ごめん。」
不意に、少女はとても悲しそうな顔をした。
それは、自分の過去を思い出して泣き出しそうになるような。思
わず、心配してしまうような。 今すぐにも抱きしめて、守って
あげないと、壊れてしまうような……。

「いや、その……。 ううん、大丈夫……。 こっちこそ……ごめん。
謝るしかないじゃないか。 そんな顔されたら……。 こっちまで、
悲しくなるじゃないか……。」
そんな、先輩みたいな顔、されたら

それから毎日来ていた少女は来なくなった。

いや、たしか隣の部屋だったから、会いに行こうと思えば行けるんだ。

でも、行って何を話す？　ずっと彼女の言葉を、好意を、無視し続けていた。

それは、それは。

それは……

彼女が、僕の愛した人に似ていたから。

先輩に、似ていたから。だから彼女の顔を見れなかった。

見ると、見るたびに先輩を思い出すから。

先輩が僕に残したものは、このペンダント一つ。それと、思い出。

彼女の顔を初めて見た時、僕は泣いた。

自分でもびつくりした。自然に涙が頬を伝って、床を濡らした。そんな僕を彼女は見ていた。だから、僕に話しかけてきたのか

もしれない。

今日も僕は窓から外を眺めている。

ずっと、今までのことを思い出しながら。

手首についた、無数の後悔を眺めながら。

「ねえ、貴方は、どんな人？」

彼女だった。

「私は、節芽ふしめ 鈴りんって言うんだ。この病院には怪我をしたから入院してるんじゃない。もう一つの理由。私は学校で家で外ですべての場所で居るべき場所を失ったの。学校では先生まで一緒になつて私を殴った。そして笑った。家では母に殴られ、罵られ、兄と父にされ、妹までが私にナイフをつきつけたわ。そうやって私は

壊れた。一瞬で壊れた。ガラスの様だったわ。この病院には自分で来た。私みたいな人間がたくさんいるって聞いて。ここで知り合った人の素性や嫌な過去を聞いているの。そうやって痛みを分かち合っているの。同じ苦しみを経験した人はいなかったわ。みんな、『私、鬱なの。学校でいじめられたの。大変だったのよ？鈴ちゃんは？』なんて涼しい顔で聞いてきたわ。私の過去を聞いた人はみんな私から遠ざかった。私の居場所はここにも無かった。そう思った。そう思ってたなら、足を無くした男の子がやってきた。私と苦しみを分かち合える人が、やってきた。」

彼女は一気に喋った。

何かを吐き出すように、あの時の悲しい顔で。

僕も一気に喋った。全てを吐き出して。

それから僕と鈴は毎日話すようになった。

毎日鈴が僕の病室に来てくれた。

看護婦も気を使ってか、鈴の分の食事をここに運んでくれていた。

そうやって、朝から夜までずっと一緒にいた。

もちろん、他の人も話した。8人という大勢で話すこともあった。

僕は、鈴を先輩の変わりりにしていた。

そう、死人の変わりを、生きた人間にしていた。

それは、絶対にはいけないタブーだということも知らずに。

「なあ、君はさ。」

静まり返った昼下がり。小鳥が窓の外で鳴いている、温かい春のじつ。

最近ではよく二人で昼寝をするようになっていた。
今日もそんな感じで目を虚ろにしていた時、鈴の口が開いた。

「うん？ 何？」

「君は。いや、君にとって、私は希望になれているのかな？」

急にそんなことを聞いてきた。

鈴は僕にとって、今の一番の光だ。

鈴がいるから今を楽しんでいる。

だから、素直に答える。「もちろん。鈴は僕が一番の、希望だ。」

好きだ。

素直に、答えた。

鈴の目から涙が溢れた。

俯いて、涙で僕のベッドシーツを濡らす。

悲しそうな顔はしていなかった。だから、僕は鈴を抱きしめた。

強く、強く。でも、優しく。

彼女の嗚咽がおさまった頃、僕は彼女のあごを上に向け、顔を見合わせた。

そうして、希望を、痛みを、分かち合うように、キスをした。

その時、僕は先輩の姿を鈴に重ねることをしなくなっていた。

純粹に、鈴が好きだった。

泣きつかれた鈴が僕の、腰の下で眠りについた。

本来足があるべき場所で。

僕は初めて足のことを後悔した。

鈴を膝枕してあげられないじゃないか。それはとても大きな後悔さ。

なんて冗談を考えられるくらいに、僕は希望を快復していた。心をそれで埋めていた。

でも、それはまたすぐに、無くなった。

次の日、鈴は自分の命を死神に引き渡した。

もう既に、僕と鈴はこの病院にいる必要はなかった。

そんな話しをしていた。最中。

僕の入院期間は、伸びた。

心を失って。

僕は心を失った。

誰もが僕に話しかけることを諦めた。

そして、1年がすぎた、春。

虚ろな目をした、心を失った少女が隣部屋にやってきた

希望の中で（後書き）

はい、番外編に続く形で書いてみました。
これから一か月、『僕』の心は3度目、快復します。

続くかは、わかりませんww

なんかこの話しはいらえない感じがしてならないのですが、なんででしょうか。

主人公に腹が立つとかではないですけどね。

うーん。失敗した気がする。 （2011年8月22日談）

今までの結果（前書き）

なんでしょう、この話しはすっごく書きやすいですww
だからついつい続きを考えちゃって……、書きたくなるというw

今までの結果

この病院に来てから2年近くが経った。

2度目の春が訪れ、心地よい風が吹くようになってきた。

太陽も控えめに地面を照らしている。

少しだけ差し込む光を鬱陶しげに思いながらも、半分ほど開いた窓から入る風に少しだけ笑顔をこぼしていた。

味気のない病院食を食べてから、お腹の休憩をし、今は病院の図書室で借りた本を読んでいる。

三分の一程読み終わったところで、扉の前に人を感じた。

冬も終わり、段々と気温が上がってきている所為もあり、この前辺りから扉は開け放たれている。

だから、扉というよりは入口。

そこに立っていたのは、女の子だった。

こんな風に言う知らない人みたいに聞こえるけど、この子はすごく知っている人。

知りすぎて困るくらい知ってる人……。

というか、自分で自分のことを話しまくるから、自然にこの子の事を知りすぎてしまった。

「そんなところで何してるの？ 入ってくればいいのに。」

「楽しそうに読書にしているからさ、邪魔しちゃ悪いかなあ〜？ つてね。」

「別に、大丈夫だよ。暇だから読んでただけだし。むしろ話しかけてくれるとうれしいかな。」

そう言って笑顔向けると、彼女は安心したように微笑んだ。

「それにしてもさあ、今までの寒さが嘘みたいだね。 起きた

ら寝汗が酷くて。」

「鈴奈は汗っかきだからね、身体がまだ暑さに慣れてないんだよ。もう少しすれば少しは楽になるんじゃないかな？」

パイプ椅子に座った鈴奈はぐったりとしてベットにもたれかかっている。

鈴奈の頭を撫でてやりながら、「うちわで扇いであげようか？」と聞くと、顔をシーツに埋めたままコクンと頷いた。

枕の下にあっただうちわを取り出して、目の前の黒い塊に向かって扇いでやる。

『あ』に濁点の付いたような声を出して髪を揺らす鈴奈は、僕に心を開いているように見えた。

あの時とは違って、ちゃんと開いているように見えた。

僕と鈴奈が会ったのは、僕が2回目の別れを迎えて1年が経った時だった。

虚ろな目をしていた女の子は、僕に鈴の姿を思い出させた。

でも鈴の時と違って、それは嬉しい感情ではなかった。

逆の、怒りの感情だった。

鈴奈の姿を見た瞬間、頭が熱くなった。

気が付くと、僕は鈴奈を床に押し倒していた。

「なんでまた思い出させるんだ!？」

「どうして僕に悪夢を何度も見せよう!?!」

「彼女を思い出させるな!これ以上!」

等々……。

その時、鈴奈の目に光が戻った気がした。

押し倒されていた鈴奈は、小さな身体とは思えないくらいの力で僕を押しつけて言った。

僕はその一言で変わった。

この病院に来るといふことは、それなりの悲痛なことがあったか

らだ。

その出来事を思い出させることを、僕は鈴奈に言ってしまった。だから鈴奈は怒り、僕にその言葉を言った。これも鈴奈自信から聞いたことだ。

考え事をするとうりが見えなくなるといふのは厄介だと思つ。

鈴奈が僕の名前を呼んでいるのに気が付かなかった。

「ねえ、聞いてる?!」

「え? あ、うん。ごめん、何だっけ?」

僕が我に返り、急いで返事をするとうりは頬を膨らませて拗ねてしまった。

こりゃあ……、謝つてもしばらくはこのままかな……。

こうなると鈴奈は何も話さなくなってしまう。

だからこういう時は、頭を撫でてやる。

それで鈴奈の機嫌が直るわけではないんだけどね。下を向いて拗ねている鈴奈が珍しく呟いた。

「私と……」

「うん?何?」

つい笑ってしまった。

こんな時にあの時と同じことを言うもんだから。

「私といる時に他の人のこと考えないでよ!」

あの時と違つたのは、鈴奈の頬が真っ赤になっていたこと。くらいかな?

今までの結果（後書き）

「僕」の幸せな生活の一部でした。

色々伏線張ってはいるんですが、回収できるか出来ないか…… W

もし読んでくれた方がいらっしやれば、ありがとうございます。

よろしければ評価&感想お願いします W

自業自得自償（前書き）

幸せな生活を初めて手に入れた「僕」

けれど幸せに慣れていない人間は必ずその幸せに疑問や不安を持ってしまう。

そんな「僕」は安心できる幸せを手に入れることができるのでしょ
うか……

自業自得自償

鈴奈と付き合い始めてから2年が経った。

鈴奈から告白をされたのは、二人がほぼ同時に退院してからすぐだった。

親に借りてもらったアパートで新しい生活を初めて2日後、なんの連絡もなく僕の部屋にやってきて一声。

「付き合ってください！」

顔を真っ赤にして言う鈴奈を見て、「かわいい……」と思わず呟いてしまった。

親も親戚もいない鈴奈は、本当なら施設に入れられるはずだった。退院したとはいえ、まだ精神的には不安定な部分もあるため一人暮らしはさすがに無理だろう。という病院側の気遣いだった。

施設に入った鈴奈はその日の晩にそこを抜けだし、僕の元へ向かったという。

今では精神も安定して、落ち着いている。

前みたいに、たまに無感情な暗い顔をすることもなくなった。

鈴奈の告白を肯定という形で受け取り、それからすぐに二人で僕のアパートで暮らすようになった。

幸せだった。

もともと住んでいた所とはなんの関係も無い、まったく別の、遠く離れた、僕のいた痕跡の無い土地。

そこでの全く新しい生活はとても充実していた。とても幸せだった。

当初、一番の心配の種だった「足が無い」僕の特徴。

近所の方や仕事先の先輩達は、それを僕の一つの個性として受け入れてくれた。

誰もバカにしたりはしなかった。

何よりうれしかったのは、足が無いことについて興味本位で聞いてくる人が無かったこと。

そんな幸せな生活がいつか終わらないか心配になることが多くなくなってきた時期があった。

それまでの2年間色々あったけど、それにも慣れて、幸せだけで埋もれた僕の心に、余裕ができた。

その余裕を、僕は心配で埋めてしまったのだ。

ガタンガタンとリズムよく揺れる電車の中で今日あったことを思い返す。

中の良い先輩に心配されてしまった。

「お前、最近暗い顔してるけど何かあったのか？」と。

その時は曖昧に誤魔化したけど、気を付けないうちと心配させてしまうことになる。

僕をここまで幸せにしてくれた人に無駄な心配はかけたくはない。だから、僕は強く在ろうと思って生きる。

そうじゃないとここまで生きてきた意味が、僕を生かしてくれた人達の意味が無くなる気がするんだ。

家に帰れば大好きな人が待っていてくれる。

玄関を開けるときは笑顔で。暗さなんか微塵も出さない。

自分では気を付けているつもりだった。

だけど、想像以上に周りは僕を見ていてくれていた。

それは嬉しいことだけれど、心配される度に僕の不安は膨らんでいった。

心にできた余裕を埋めるように、心を広げていくように。

不安は日々増していく、そして不安は伝染していく。

一番近くにいる人に

「出来ちゃった結婚」なんてのを、僕は前々から馬鹿にしていた。子供ができる前に結婚しておけよ。なんて思っていた。だけど子供というのは本当に唐突なもので、予想以上に予想外のことらしい。

つまり何が言いたいのかと言うと、子供ができた。

もちろんまだ籍は入れてないし、結婚式なんかも開いてない。そもそも開ける程お金に余裕もない。

近所の方や、仕事場の先輩、同僚は祝ってくれた。だけど

「やつぱり赤ちゃんは諦めよう。」

仕事先から帰ってきてからのことだった。

「なんで？ あんなに喜んでできてたじゃない。」

「当たり前だろ、医者からも言われた。『今のまま出産に入れば母体が危険すぎる』って。聞いてただろ？」

「聞いてたよ！ だから何？ だから諦めろって？ いやよ！

やつと赤ちゃんができるの！ だから……だから、お願いだから……

…産ませてよ……。」

必死で悲痛な声を出す鈴奈に、僕はこれ以上何も言うことが出来なかった。

妊娠したとわかった次の日、すぐに二人で病院に行った。

そこで言われた言葉。

『子供は産めても、お母さんの方は無事では済まない可能性が大きすぎます。』

遠回しに言っただけだけど、それはつまり「死ぬ」ということだろう。

僕にとっては子供よりも鈴奈方が何倍も何十倍も大事。

だから鈴奈には子供を諦めて欲しかった。

僕の気持ちをわかって欲しかった。

でも鈴奈の意志は頑なで諦めてはくれなかった。そうやって時は過ぎていく。

段々と出産予定日は近づいてくる。

陣痛が始まり、日が進みにつれその回数も増える。

その間の鈴奈の様子は酷かった。

お腹が膨らむのに比例するように腕や頬は細くなっていき、元気も無くなっていった。

少し歩いただけで肩で息をして、とても外を出歩ける状態ではない。

そんな中で鈴奈は常に笑顔だった。

無理をしているとか、心配をかけたくないとか、そんなのではなかった。

むしろ、意地。 ヤケクソ。

「笑顔でいないと挫けちゃうから。」 鈴奈はそう言った。

その顔も笑顔だった。 だけどその笑顔は信じられる笑顔ではなかった。

無理矢理作った、自分のことなんか考えてないような、そんな笑顔。

その時の僕は不安だらけで、だから彼女の笑顔がそう見えただって。 そう無理矢理理解した 自分を安定させる為に。

僕はこのときから、自分が後悔することをわかっていたのかもしれない。

幸せに溺れて、世界がこんなにも冷たいんだということを忘れていた僕に、神様は罰を与えたのだろうか。

神様は相当に、僕が嫌いなんだろう。

出産予定日の2週間前、それはいきなりきた。

病院から、会社にいた僕に電話がかかってきたのだ。

電話を取ってから十数秒後には病院へ向かう準備を始めていた。

病院に着いた頃には、鈴奈のいる部屋には痛みを堪える声が響き

渡っていた。

看護婦に言われ、ベッドの横に膝をつき鈴奈の手を強く握った。

「大丈夫、頑張れ頑張れ！」

僕には励ますしかできなかった。

だから、鈴奈の悲鳴が段々と小さくなっていくのに気が付いた時、何もできなかった。

どんなに励ましても、どんなに声を荒げても、どんなに骨が軋む程に手を強く握っても、鈴奈の声は少しずつ小さくなっていく。

鈴奈が顔を苦痛に歪めながらも、それとわかる笑顔を見せた。

色々な表情が混ざった顔。その口が微かに動いた。

「*****」

何かを言ったのはわかった。その時僕の中で何か吹っ切れた。

「鈴奈！ 無理して喋らなくていい！ 赤ちゃんが産まれてからたくさん聞いてやるから！ それから、産まれたら名前を決めよう！ な！？ いっぱい話そう！ だから今は一つのこと集中してくれ！」

鈴奈は僕の言葉を聞くたびに小さく頷いた。

痛みを耐えながら、それでも僕の言葉をしっかりと聞いていた。

それから僕は何時間も叫び続けた。

鈴奈は途中から頷くことを止めた。

痛みが強くなって来たのか、そんな余裕がなくなったのだろう。

僕はそれまで以上に声を上げた。

僕が声を強くすればする程、少しずつ鈴奈の声は小さくなる。

それからさらに数時間後。夜明けを知らせる白い光が窓から差し込んだ。

眩しさに目を細めると、それまで感じなかった疲労が一気に身体に押し掛かった。

既に鈴奈の声は時折苦しそうな声を上げるだけになった。

数分後、鈴奈の口から音が消えたのと同時に、大きな鳴き声が広

く響き渡った。

それからは無気力に作業的に生きた。

子供には先輩達が名前を付けてくれた。

鈴奈から一文字、それから産まれた時に差し込んだ光をイメージして「白奈」。

白奈には愛情を注いだとは言い難かった。

それでも子供は育つ。

それまで以上に、周りの人の助けを借りて白奈を育てた。

白奈が自分のことをある程度自分でできるようになってからは、僕の生活はさらに作業的になったと言っている。

白奈を保育園に送った後に会社に行き、仕事をただ淡々とこなす。

家に帰れば夕ご飯を作り、白奈に食べさせる。

風呂に入らせ、歯を磨いてやり、寝付かせる。

ただそれだけ。

白奈はいろんなことを話してくれた。

鈴奈に似たのか、お喋りは好きらしい。

曖昧な相槌しか打たない僕相手でも、楽しそうに話してくれていた。

いつものように白奈の話しを聞いていたときのこと、僕は次の日の仕事のことを考えていた。

「パパ、聞いている？」

「ん？ ああ、聞いているぞ。」

「ママのときみたいに、一緒にお話ししてるときは別の人のこと考えないですよ？」

「ああ、悪かつ……、おい、なんで白奈がママとパパの会話のことを知ってる……？」

「ママがそう言ってるから……。」

頭が真っ白になった。

鈴奈の声が聞こえる？ そんな馬鹿な。

幽霊とか、そんなのを僕は信じていなかった。

現実だけが全てなんだ、そんな非科学的なことなんかありえない。でも白奈は知っていた。

そして言った。『ママがそう言ってるから』と。

その時はそれで終わりにした。それ以上考えても無意味だと思っただけだ。

でもそれから、同じようなことが何度も起きた。

白奈には、鈴奈の記憶があった。

鈴奈の声が聞こえていたわけではなかった。

全てでは当然ない。だけど鈴奈が僕と出会ってからのほとんどの記憶が、白奈にはあった。

信じられなかった。だけどそれは現実。

現実こそが全て。

そして今、僕には少しだけ気力が戻ったのかもしれない。

同僚や先輩とも、前のように笑いあえるくらいにはなった。

白奈とも最近は積極的に話している。

鈴奈がこの世からいなくなったことを忘れたわけでも、悲しさが無くなっただけでもないけど、それでも僕はもう一度希望をもつて生きたいと思えた。

それは、白奈に鈴奈の記憶が残っていたから。

鈴奈がいたことを大きく証明できるものが、記憶。

それを証明してくれるのが、白奈。

僕と鈴奈の子供。

余裕ができれば不安で埋めてしまふのが僕という人間らしい。

鈴奈がいけないことは僕にとって、想像以上に大きいことだった。

鈴奈のことを考える度にどうすればよかったのか、考える。

白奈のことは愛している。白奈を命がけで産んでくれた鈴奈も当然。

だけど、白奈を生まなければ鈴奈は生きていた。死ななかった。じゃあどうすればよかったのか。

答えのない問を延々と頭の中で考え続ける。

心配はさせまいと、家の中、外関係無く務めて明るく人に接した。だけど血が繋がっているからか、今度は白奈に心配させていた。それが初めてわかったのは、白奈と一緒に寝ているときだった。

白奈が唐突に話し始めた。

「パパ？ お仕事大変なの？」

最初は疲れていると思わせてしまったか、と思った。

「時々パパね、悲しそうな顔してるから……」
よくわからなかった。

たしかに疲れてはいる。だけど、今は幸せだ。悲しいことなんかないはずなのに。なのに白奈にはそう見えていた。

白奈は続けた。

「ママがいないと、寂しいから？」

白奈が心配そうに僕の顔を覗き込んできた。

小さく微笑み、頭を優しく撫でてやると、白奈は笑顔になった。

「大丈夫さ。 たしかにママがいないのは悲しいけど、今は白奈がいるからね。 パパは幸せだよ、だから、白奈はそんなこと心配するな。」

そういうと、白奈は大きく頷き、僕の耳元に口を近づけて優しく言った。

僕は枕に顔を埋め、少し落ち着いてから顔上げて白奈に「早く寝な」とだけ言っただけでリビングに出た。

そこで僕は溜めていた涙を一気に出した。

まさか白奈にそんなことを言われるとは思わなかった。

ただただ嬉しくて、身体中で幸せを感じた。

僕にはこの生活が本当の幸せなのかはわからない。
でも、少なくとも、自分の今の暮らしに疑問や不安をもつことは
無くなった。

これからも僕のことを嫌いな神様は、色々な試練とやらを僕に与
えるんだと思う。

でも僕はそんなものを簡単に乗り越えられると思う。

だって、今までも絶望の中で乗り越えてきたじゃないか。

今のこの幸せなときに、壁なんかただの階段にしか過ぎないだろ
うと、僕は思うね。

あんなことを言われちゃあ、頑張るしかないしさ。

「白奈がママの代わりになって、パパをたっくさん大好きになる
からね。悲しまなくてもいいんだよ。」

自業自得自償（後書き）

ラストで感動する話しが書きたいけどそういう才能は無いようだけ

orz

これで「暗闇の中で」は終わりにします。

曖昧は良くないのでねw

もし、仮に、いないとは思いますが！（）（）

ここまで読んでくれた方がいれば本当にありがとうございます。

つたない文章で読みにくいですよね…

書き忘れていました。

白奈を産む直前、鈴が言った言葉は「だいすき」でした。

最後の白奈の言葉とも重なっているのです、そこで色々と、読んでくださった方が想像して頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4952s/>

暗闇の中で

2011年10月9日00時12分発行